

4. 緩和デイケア・がん患者サロン・デイホスピス等の活動

D. 岡山済生会総合病院「サロンさいせい」

金田美佐緒
(岡山済生会総合病院)

サロン開設までの経緯

岡山済生会総合病院は553床の公的病院で、2002年に厚生労働省から「がん診療連携拠点病院」(2006年地域がん診療連携拠点病院に名称変更)の認可を受けた。当院では2009年8月、「がん診療連携拠点病院整備に関する指針」に沿ってがん患者・家族のためのサロン開設の準備を開始し、同年9月からがんサロン(以下、サロン)を開始した。

開設にあたり院内の関係者(医師、看護部、薬剤部、栄養課、医療福祉課、臨床心理士、がん相談支援センター等)に呼びかけ、準備会を開催した。がんの種類を問わないで自由に患者、家族が参加して思いを語り合ったり、互いの情報交換をしたりできる場と時間の提供をする交流サロンの設置を提案した。会議には関係者12名が集まり、サロン開設の了解と、今後も継続して協力が得られることが話し合われた。会議で話し合われたことを基に実施要領を策定した。サロンの名称は当岡山済生会総合病院の「済生」には再び生きる、蘇るという意味があり、この会にふさわしいという第1回の参加者たちの意見で「サロンさいせい」と命名した。

サロンの運用と実際

実施要領に基づいて、サロン運用の概要を表1に示した。毎回のアンケートを基に担当者が定期的にカンファレンスをもち、問題点を検討し次回プログラムに反映するように話し合っている。

2009年9月～2015年10月までの約6年間を通して、サロン登録者は患者本人88名、家族58名で、

表1 サロンさいせいの概要

場所	岡山済生会総合病院西館1階会議室3
日時	毎月第3金曜日 午前10時～11時30分
対象	院内外のがん患者とその家族
運営スタッフ	医師・看護師・薬剤師・管理栄養士・臨床心理士・MSW・ボランティア
コーディネーター	がん相談支援センターMSW
広報	当院ホームページ・ポスター掲載(外来・病棟)・患者情報誌等
プログラム	前半:15分ミニレクチャー 後半:フリートーキングによる交流会

* ボランティア: 当院緩和ケア病棟で活動しているボランティアの中の有志

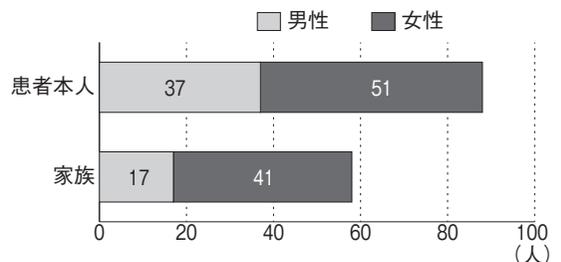


図1 サロン登録者数 (2009.9～2015.10)

そのうち夫婦での登録36組、子どもと同伴2組であった。実人数としては146名の登録となり、図1に示した通り、患者本人・家族とも女性が多い。

年度別の参加者数と参加回数を表2と図2に示す。サロン参加は事前申し込みを原則としているが、当日まで不明のことが多い。リピーター率(複数回の参加割合)は49.8%と約半数で、4回以上の継続参加者は21.8%を占めていた。

参加者の疾患(表3)は、消化器がんが多く占めており、当院の特性を示しているように感じる。ステージⅢ・Ⅳの進行がんで再発・再々発が

表2 年度別サロンさいせい参加者状況 (人)

参加回数	1回	2回	3回	4回	5回以上	参加者延べ数
2009	16	2	2	1	5	57
2010	17	5	4	1	8	113
2011	17	7	3	4	10	131
2012	13	7	3	2	3	73
2013	12	4	4	2	1	48
2014	17	8	1	1	3	61
2015	14	6	3	1	4	62
計	106	39	20	12	34	545

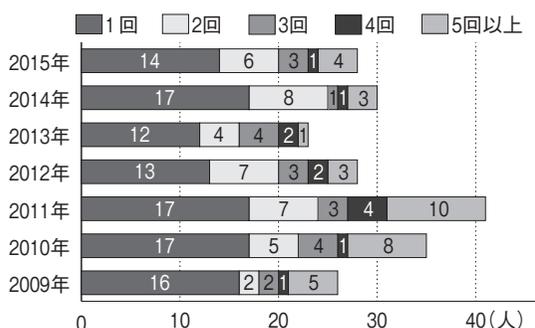


図2 サロン参加者数・参加回数 (2009.9～2015.10)

多いのも特徴である。そのためか登録者の半数以上は、現在すでに死亡している。一方、サロンスタート時の登録メンバーの約1/3は今も生存し、がん医療の進歩やがん種の相違を実感するところでもある。

1. 参加者の声

参加者の満足度やニーズを知る目的で、サロン終了後にアンケートを実施しているが、ミニレクチャーや交流会の内容に関する評価はおおむね満足している回答であった。最近の感想から、「サロンは暗いイメージがあって、なかなか足が向かなかった。このたびのテーマ(体力アップのエクササイズ)は寝たきりにならないためにそれでも思い、勇気を出して参加したが、参加者が皆さん明るく元気なので驚いた。こんなことならもっと早くから参加すればよかった。損をしていた気分」という声があった。サロンの魅力をいかに広く広報するかが問われていると反省した。

表3 サロンさいせい参加者の疾患 (2009.9～2015.10)

疾患名/男女	男	女	計
大腸がん	14	13	27
胃がん	14	10	24
すい臓がん	5	5	10
肝臓がん	2	2	4
食道がん	4	0	4
胆管がん	3	1	4
肺がん	9	7	16
乳がん	1	10	11
卵巣がん	0	3	3
その他	2	5	7
計	54	56	110

2. スタッフの声

2014年、当院でサロンに関わった経験のあるスタッフ全員(14名)の意識調査を実施した。サロンは87.5%が必要とし、全員が「サロンで学びを得ている」と回答し、75%が「成長している」と答えた。そして「今後も積極的に関わりたい」と答えた人は81%であった。この結果から、ほとんどのスタッフは協力することで自身の学習につながり、成長していることを自覚していることが分かった。また、フリーコメントでは、「自分の仕事として関わった時には聞けなかったがん患者の生の声、本心を聴き、サロンのもつ力、重要性を学んだ」「予後の良くない患者が自分の状況を話す場面で、参加者がいたわりあい、励ましながらひとつになり、頑張ろうとしている姿が印象に残る」という記載があり、スタッフは「サロンはがん患者の生の声を聴くことができる場」と捉え、大切な存在と考えて参加しているとみられた。

サロンの成果と意味

以上、われわれの6年の実践から、がん種を問わないサロンが、患者・家族および職員にも有効な学びと交流の場としての役割を果たしていることは確かである。

夫婦での参加はリピーター率を高めていると同

時に、家族から見た患者、患者から見た家族への思いが率直に語られるため、互いの理解を深めていく場になっている。また他の参加者も自分の家族への理解が進むという効果もあり、相互の思いの学びの場になっている。また、先輩たちは新しい参加者に対して特に思いを尊重し、丸ごと受け止めようとする傾聴の態度が自然に生まれていて、癒しの場にもなっている。「手術して良くなると思っていたがそうではなかった。しかし、しんどい時に横にならないで頑張っていて動いているとしんどさがどこかへ行ってしまう。できるだけ普通の生活をしようと心がけている。希望が力になるから、皆さんからもらいたいし、あげたい」「ここに参加することで元気をもらって帰っている。ほかでは話せないことを安心して話せる場だ」「病気のことはだれにも話したくなかったが、ここなら安心して話せる。宝物を見つけたような気分だ。分かり合える、分かち合える大切な場、みんなに教えてあげたい」など、サロンによって元気が出たり、前向きな姿勢になったりと交流の場として役立っていることがうかがえる。

スタッフも、サロンをがん患者の生の声を聴くことができる場と捉え、本来の業務にも生かせる大切な存在と考えて、積極的に参加している。そ

れぞれの所属する学会でサロンに関する発表をしたり、管理栄養士はサロンに触発されて、がん病態栄養専門士資格取得にもつながったりと相乗効果がうかがわれる。

現状の課題と今後の歩み

サロンでは早くからピアサポーターの成長を期待して働きかけているが、リーダー格の患者の相次ぐ死亡でなかなか育っていかないのが悩みである。また、参加者から、有意義な会なのに参加者がどうして少ないのかと、よく指摘される。カンファレンスで検討し、広報の方法をいろいろ試みている。一時参加者が極度に減少していたが、2014年くらいからまた徐々に増え始め、リピーターが定着するようになり、サロン全体が活気づいてきたように感じる。約6年の実績を踏まえ、今後、より参加しやすい場所や時間、回数などのハード面にも工夫し、多くの人が安心してがんの療養が送れる場づくりを模索したいと考えている。また、遺族のサロンを始めて2年が経過し、好評を得ている。今後、これらが互いに有機的に交流して、がんサロンのさらなる充実を図りたいと考えている。